



The Cinema of UCG Choice

悪事に不向きな、荒んだポンティアック

『スモーキン・エース／暗殺者がいっぱい』

5月12日(土)公開

有楽町スバル座ほか全国にて

モヒカンとスキンヘッドの見るからにクレイジーな3人組は、種違いの兄弟にして殺し屋、トレモア兄弟である。といっても“殺し屋”という言葉から連想するような美学は皆無だ。チェーンソーとマシンガンを手にとりターゲットに近づいて、その一人を殺すために半径10メートル四方くらいにいるすべての人間をへっちゃらで皆殺しにして雄叫びを上げる。その様は、むしろ野獣という言葉が相応しい。100万ドルの賞金首を7人の殺し屋が奪い合い、壮絶な銃撃戦が繰り広げられる『スモーキン・エース／暗殺者がいっぱい』に登場する彼らが乗っているのは、おそらく66年型のポンティアック・カタリナシリーズの1台だ。

カタリナは59年から81年まで売られていたフルサイズのポンティアックで、野獣のような荒くれ者が選ぶクルマではもちろんない。左右に2灯ずつ配したタテ目のヘッドライトと横のラインが強調されたグリルのバランスがよく、猛禽類のクチバシのように中央がとがったフロントマスクも独特で、個性的なデザインも魅力的な大衆車である。確かに6mに近い全長はマッチョな時代の威圧感を感じさせ、今の時代であればそんなクルマにも見えてしまうかもしれない。だがそれ以上にこのクルマを荒ませているのは、この兄弟のあまりに荒くれな扱いである。赤と黒

でテキトーに塗装された表面はカスカスのサビサビ、右側のライトはひとつが壊れっばなしで、拳銃の果てはその横つ腹を電柱代わりにして立ちションまでする。左右の鼻先に装着された、丸のついた十字架のようなものは、60～70年代のアメリカを震撼させた連続殺人鬼ゾディアックのマークだ。こんな扱いを受けたら虫も殺せない人間だって、ド迫力の殺人犯のような顔になってしまうに違いない。映画に登場するクルマをたくさん見てきたが、ここまでイジメられたクルマも珍しい。兄弟の、あまりにメチャクチャなキャラクターに笑いながらも、ああ、40年も前のクルマなのに…



…と見るほうはため息である。

だがこのあまりにビジュアル・インパクトの強いクルマは、彼らが殺したつもりが殺し損ねたある男の記憶に焼きつき、最後には兄弟の命取りとなる。タランティーノを思わせる笑いを散りばめたクライム・アクションの、ここが笑いどころ。教訓は「もし悪いことをするなら、どこにでもありそうな普通のクルマを選び、それを大事にすること」である。

渥美志保

映画ライター、コラムニスト。数々の人気雑誌に映画関連のコラムを執筆している。映画に登場するクルマで最も好きなのはボンドカーのアストン・マーティン。